

[別紙 2]

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 友松 夕香

1980年以降、アフリカの農村部を対象とした家計研究や経済学研究では、生産資源の配分のあり方を男女の対立軸でとらえる手法が大勢を占めている。しかし、この手法は男女の競合関係や不和を強調するあまり、夫婦、親子、家族をはじめ、家の枠組みを超えた人々の間で築かれている不可分な経済関係を軽視してきたという問題をはらんでいる。

本研究は、ガーナ北部西ダゴンバ地域の農村部を事例に、男女対立軸の枠組みを一旦取り外し、人々の経済生活の営みを明らかにすることで、これまでの学説を再検討したものである。本研究のための調査は、2006年から2011年の間、合計21か月をかけて行われた。

第一章では、西ダゴンバ地域の農村部におけるマクロ経済の環境を歴史的に概観し、農業生産における性別分業の変化の背景について検討した。西アフリカのサバンナ気候帯に位置するこの地域では、男性が耕作し、女性が家内労働と男性の畑における播種や収穫労働を担う性別分業がみられる。しかし、トラクター耕作が普及した1980年代ごろより女性が家族男性から土地の配分を受け、独立して作物生産をするようになった。しかし、女性たちは自らの労働を増加させたこの変化を歓迎すべきものとして捉えていなかった。

第二章では、人々の生活の中心である家に視点を移し、同居家族の成り立ち、家を運営するための分業と、土地、樹木、労働といった生産資源の配分の仕組みを明らかにした。この地域では、男性たちは社会的地位を求めてより多くの妻を娶り、子孫の繁栄を目指している。その結果、家の家族構成は複雑で、拡大化する傾向にある。そして、特に複雑な構造を有する家では、基本食以外の項目において各自が自立的に生計を立て、家内でサブ集団を構成する近親家族で協力関係が構築されていることなどを明らかにした。

第三章では、作物生産における分業と、収穫や脱穀作業に伴う作物の分配の実践について明らかにした。性別分業の実態は、男性の作物生産において、女性が播種や収穫、脱穀などの収穫後の加工を担うことで男性から直接的に作物の分配を受ける一方で、女性とその子供は高い自立性を維持しているというものであった。そして、人口増加と農村経済の低迷に伴い、収穫労働を介した分配が家の敷居を超えて活発化していることを実証した。

第四章では、換金作物として重要なシアナッツをめぐる、女性の間で分配が行われる仕組みを明らかにした。より多くのシアナッツの配分を受けた女性たちとそうでない女性たちは、シアナッツが自生するという特性を利用し、また労働の効率性と機会費用に応じてシアナッツの二次収穫にオープンアクセスのルールを適用させることで、再分配体制を構築していた。

第五章では、ダゴンバ社会の政治的領域に焦点を当て、今日のダゴンバの政治実践の変容と、称号の獲得を通じた生産資源の配分の仕組み、特に男性が領土称号を獲得すること

で女性が日々の料理で利用するアフリカイナゴマメという樹木を有する特権が得られることを、農村部の小さな集落の文脈に焦点を当てて明らかにした。

第六章では、領土称号を獲得した高齢男性によるアフリカイナゴマメの収穫と女性たちへの分配の実践を明らかにした。そして、イナゴマメの木の保有制度は、そもそも「権力者」が実の経済的価値を独占するために生み出したものではないこと、そして、この実は、分配を通じて男性の地位や威信を表象するものとして利用されていることを実証した。

終章では、以上の結果に基づき、夫婦が個別に生計を立てる家計のあり方を共同性の欠如として否定的に解釈し、また男女の資源配分の差異を格差と捉えて、女性の労働の搾取や貧困を強調してきた先行研究の成果が、ダゴンバの農村社会における人々の暮らしの実態と大きな乖離があると総括した。そして、女性たちが直面する生活苦という問題の所在は、共同性が限定的な家計のあり方や資源配分の構造ではなく、今日の低迷した農村経済が背景にあることを指摘し、この結果に基づき、男女の対立関係を強調する論調を再考し、男女の不可分な経済関係を把握したうえで協力関係を重視するアプローチが開発援助において有効であるという政策的含意を得た。

以上のように、本研究は学際的な事例研究を通してこれまでの学説に実証・理論の両面で一石を投じ、将来の政策に示唆的な結論を得ることに成功しており、学術上および政策上の貢献が大きい。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。